

母の妊娠後期の食事パターンと産後のボンディングとの関連

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本DOHaD研究会 公開日: 2018-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川波, 亜紀子, 大竹, 正枝, 渡邊, 応宏, 櫻井, 健一, 森, 千里 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/3275

母の妊娠後期の食事パターンと産後のボンディングとの関連

○川波亜紀子¹⁾、大竹正枝¹⁾、渡邊応宏¹⁾、櫻井健一¹⁾、森千里¹⁾²⁾

- 1) 千葉大学予防医学センター
- 2) 千葉大学大学院医学研究院環境生命医学

【目的】母が乳児と健全な関係を築くことは児の早期発達において重要であるが、母のボンディング（児への気持ち）形成は妊娠中から始まっているという報告が多くある。母が胎児への労りの気持ちや出産・子育てへの意欲を持てる場合にとる行動の一つとして、妊娠中に健康的な食生活を心掛けることが考えられるが、妊婦の食生活とボンディングとの関連を示した報告はほとんどない。そこで、本研究では母の妊娠後期の食事パターンと産後のボンディングとの関連を調べることを目的とした。

【方法】「胎児期に始まる子どもの健康と発達に関する調査（C-MACH）」の参加者から回収した質問紙データを用いた。母の産後のボンディング自己評価票 Mother-to-Infant Bonding Scale (MIBS)、及び妊娠 32 週頃の食事調査票 Brief-type self-administered diet history questionnaire (BDHQ) のデータ欠損値を除き、255 件を解析対象とした（有効回答率 59%）。食事調査データを主成分分析及び階層的クラスタリングを用いて分類を行い、母の産後ボンディング、エジンバラ産後うつ病自己評価票 Edinburgh Postnatal Depression Scale (EPDS)、社会経済的背景に対して群間比較を行った。検定には χ^2 検定、t 検定を用いた。

【結果】食事パターンの解析を行った結果、2 群に分類することができ、Group1 には野菜・魚・米を多く摂取するという特徴、Group2 には菓子・麺類・嗜好品を多く摂取するという特徴があった。どちらのグループにおいても、妊娠を知った時に肯定的な気持ちを持つ割合に有意差は見られなかったが、Group2 において産後 1 か月時に児への否定的感情を持つ母の割合、及びうつ病傾向の母の割合が有意に高かった ($p < 0.05$)。また、Group2 において母が妊娠初期に就業していた割合が有意に高かった ($p < 0.05$)。

【結論】母の妊娠後期の食事パターンと、産後 1 か月の児への否定的感情やうつ病傾向との関連が見られた。本研究結果は、妊娠後期に健康的な食事を摂る母は、産後児へのボンディングをうまく形成している可能性を示した。母の健康的な食生活やボンディングを形成する共通要因として、就業状況、家族のサポートの有無が考えられる。比較的簡易に調査・介入可能な妊娠中の母親の食事についての調査を行うことにより、産後のボンディングの影響要因を探り、母子、家族の早期支援につなげたい。